

鎮魂の歌 何年先でも

阪神大震災

21年

森さんは堺市出身。神戸大4年だった弟渉さん(当時22歳)は、神戸市東灘区の自宅アパートが倒壊し、下敷きになって亡くなった。「心に穴が開いたような気持だった。その分、いろいろな人の心の痛みが分かるようになった」と振り返る。

震災直後の神戸でコンサートを聞いた時、高齢の被災者にあんたの歌を聴いておながすいた。やっとなにか食べる気になったと言われた。生きる気がなくなると食べ物にも手が伸びないことを知った。自らの歌を「心の救援物資」と呼ぶ。

昨年までは、いくつもの震災関連行事へ出演の依頼があったが、今年はほとんどなくなった。「市民による追悼行事を考える会(神戸市)によると、昨年

阪神大震災で弟を亡くし、国内外で被災地支援のチャリティコンサートを開いてきたゴスペル歌手、森祐理さん(大阪市北区)が17日、初めて自らが主催して「追悼のつどい」を兵庫県西宮市の教会で開く。昨年の震災20年を区切りに追悼行事が減っていることから、「震災の記憶を語り継ぎ、歌い続けたい」と自ら開催することにした。(1面参照)

弟亡くしたゴスペル歌手 17日に集い



阪神大震災から21年となる17日、「追悼のつどい」を開く歌手の森祐理さん＝大阪市中央区で15日、森園道子撮影

追悼行事減少に心痛め

は1月17日前後に民間の追悼行事が110件あったが、今年は59件(7日現在)という。森さんは「被災者がともに祈り、泣きながら前を向いて生きようと思える場所が必要。自分で立ち上がりなければと気付いた」と話す。

つどいは17日午後5時、西宮市神楽町1の日本フリースタイル神楽町教会で。復興応援歌の「しあわせ運べるように」や賛美歌を歌う。神戸市の追悼式の前実行委員長の白木利樹さんや、震災で亡くした長男への思いを込めて「笑顔の向こうに」を作詞した高井千珠さんら遺族の体験も聞く。入場無料。問い合わせはモリユリ・ミュージック・ミニストリーズ(06・6762・2324)。(石川勝義)

愛する人 慈しむ 日

森さんは、弟を亡くした悲しみを抱えながらも、震災の2か月後にはがれきが残る被災現場で歌い始めた。自家発電のマイクで避難所などを回るうち、一人の女性が「あなたの歌を聞いて心が安らい

だ」と言ってくれ、それから国内外で被災者に寄り添ってきた。県内では、阪神大震災の追悼行事を見直す団体が増え始めている。だが、行事では森さんの前で涙を見せる遺族もおり、悲しみの癒えない人の思いを受け止めたいと、今年からは自ら集会を開くことを決めた。

この日は、震災で肉親を失った遺族ら約140人を前に、賛美歌や「しあわせ運ぶように」「花は咲く」などを歌い、「生かされた人たちで悲しみを共有するだけでなく、語り継ぐべきことをみんなで胸に刻み合ひましょう」と呼びかけた。

森さんは「私自身、消えない心の痛みがあるが、歌を通して教え切れないほどの絆ができた。これからも活動を続けていく」と語った。(梅本寛之)

心の支え 歌い続ける



遺族らの前で賛美歌などを歌う森さん(西宮市で)

阪神大震災から21年となった17日、阪神間各地で終日、鎮魂の祈りが続いた。一つの節目とされた20年を経て、追悼行事を見直す動きも見られたが、遺族や被災者震災を知らない若者らは歌声、鐘の音、黙とうで「今後も世代を超えて語り継いでいく」との思いを新たにすた。

阪神
大震災
21年

「心の穴に宿った優しさ」

阪神
大震災 21年

阪神大震災で弟を亡くしたゴスペル歌手が6日、芦屋川教会（芦屋市津知町）で20年ぶりのコンサートを開き、聴衆に「痛みを通られた皆さんこそ本当の優しさを知らる」と語りかけた。



阪神大震災で弟を亡くした思い出を語りながら、クリスマスソングを歌うゴスペル歌手の森祐理さん。芦屋市津知町の芦屋川教会

弟を亡くしたゴスペル歌手・森さん

歌手は、森祐理さん。阪神大震災前に、NHK教育テレビ「ゆかいなコンサート」で歌のお姉さんを務めた。震災で、神戸大生だった弟・渉さん（当時22）が、神戸市東灘区でつぶれた木造2階建ての下宿の下敷きになった。葬儀で「歌は心の架け橋」と自覚め、被災地や貧困地域で歌手活動を続けてきた。

津知町では56人が亡くなった。教会は倒壊を免れたが、当時の牧師・小島十二さんの長男が亡くなり、信徒は散り散りになった。

3カ月後の4月29日、教会隣の

倒壊した民家の空き地に、森さんの歌声が響いた。

聴衆の中に当時コンサートを聞いた1人、松尾和美さん（76）＝神戸市東灘区＝がいた。「歌を聴いて当時はよみがえりました。20年経っても忘れられません」。震災で自宅マンションは全壊、たんすの下敷きになり、左鎖骨を骨折した。叔父を亡くし、芦屋の実家も失った。

「20年前、ここは悲しみに満ちていた」。クリスマスソングや賛美歌の合間に、森さんは弟を失った悲しみを語った。堺市の自宅に連れ帰った時、心にホコと穴が開いた気がした。

「その穴に人の悲しみや優しさが入ってくるんです。20年かけて、私に必要な穴だと思うようになりました」

震災20年を迎えた今年1月以降、震災イベントが減ったことにも胸を痛めている。

「涙は心のおくすり。被災した人が思いを吐き出せる場となるよう、歌い続けます」

来年1月17日、西宮市神楽町の神楽町教会で、震災コンサートを開く。
(阿久根優子)



震災で長男を亡くした白木利周さん（左）、たかいちづさん（中央）、弟を亡くした森祐理さん（右）が体験を話した。西宮市神楽町の神楽町教会

朝日新聞

2016.1/18

遺族ら体験共有 西宮・神楽町教会

西宮市の神楽町教会では、震災で神戸大生だった弟の健さん（当時22）を亡くしたゴスペル歌手の森祐理さんの呼びかけでコンサートが開かれ、遺族らが体験を分かち合った。

長男の健介さん（当時21）を亡くした神戸市北区の白木利周さん（73）は「早く息子のそばに行きたいと考えてきたが、最近、息子

にそっと寄り添い続けた」。近くに住むたかいちづ

さん（54）は、1歳半だった長男を亡くした。双子の長女（22）は今春、社会人になる。先日、「お母さん、これからは自分の人生を楽しんで」と言ってくれた。

「生きていたら、息子も同じことを言っただろう。これからは笑顔で息子を思っ

て生きていきたい」と話した。（阿久津悦子）

の持っていた夢を形にしていけたら、と考えられるようになった。各地の被災者